

## 「ローマ帝国衰亡史」(全10巻)

エドワード・ギボン(著)、中野好夫・朱牟田夏雄・中野好之(訳)

ちくま学芸文庫 1995年12月7日-1996年9月10日刊

本書はローマ帝国の衰亡を論じる際に、必ず参照すべき古典であると考えられてきた。しかし、単にローマ帝国の衰亡を解明したという歴史書の役割を遙かに超えた内容を持っている。

ちなみに、本書の第1巻は1776年に出版されている。この年にはアメリカの独立宣言があり、アダム・スミスの『国富論』が出版されている。本書はイギリスが産業革命と同時に、世界に対して近代的な学問のあり方を具体的に提示した画期的な著作であると言っても過言ではない。ヨーロッパ言語で書かれた古典的資料を縦横に駆使した歴史書ではあるが、同時に、文学的な想像力によって歴代皇帝を生き生きと描いた、歴史エンターテインメントの側面も持っている。

実際、ギボンの著作は、様々な小説や芸術に影響を与えている。例えば、辻邦生の『背教者ユリアヌス』は、著者が明らかにしているように、ギボンの記述に強く依拠している。この皇帝はキリスト教を崇拝しないという意味で背教者と呼ばれ、ヘレニズム思想に強く惹かれアレキサンダー大帝を目指し、363年には現在のバグダッド周辺まで侵略しながら、ペルシャ軍の反撃を受けて戦死した英雄である。

その後、ローマ帝国は東西に分かれ、東ローマ帝国がコンスタンチノポリスを首都として支配するにいたる。11世紀から13世紀にかけて数度にわたり結成された十字軍はエルサレムを目指すのが、この行動も宗教目的というより略奪に終始したことが明らかにされている。1453年に、トルコ軍に首都を奪取され東ローマ帝国は滅亡し、ある意味でイスラム諸国とキリスト教国の境がこの時点で確定され、現在にまで続いている。

最近出版されたアンガス・マディソン教授の『世界経済概論 紀元1年-2030年』でも明らかにされているようにローマ時代の所得水準は明らかにエジプトや東方諸国の方が西ヨーロッパ諸国より高かった。ローマ帝国の行動は先進的な東方への侵略とそれが跳ね返される歴史であったことが本書で繰り返し描かれている。

もう一つ本書のテーマはキリスト教への抑圧から、その受容、そして教会の制度化、教皇の腐敗から宗教改革へ向かう道筋を批判的に描くことにある。実際、ギボンはローマ帝国衰亡の一因にキリスト教の導入を挙げているように、国力のかなりの部分が非生産的な宗教事業に浪費されたことは事実であろう。

本書は国際政治と文明の衝突という極めて普遍的で現代的なテーマを、ローマ帝国を素材に描いた古典中の古典だと位置づけることができるだろう。